

鶴屋南北全集

第二卷

鶴屋南北全集

第一卷

編集委員

郡司正勝

廣末保

浦山政雄

大久保忠国

藤尾真一

竹柴翹太郎

鶴屋南北全集 第二卷 ————— (全十二卷)

一九七一年十一月三十日 第一版第一刷発行

定 価 四、五〇〇円

編 者 廣 末 保 ◎ 一九七一年

発 行 者 田川敬吾

発 行 所 株式会社三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話〇三(二九九)三二二二番
振替東京八四一六〇番
郵便番号 一〇一

印刷所 株式会社三陽社
製本所 株式会社鈴木製本所

凡例

表記は、底本のままを原則としたが、読みやすくするために、次の諸点に手を加えた。

- 1、台帳では、セリフの冒頭や、ト書きの文中の人物を、俳優名で示すが、これらはすべて役名に改めた。
- 2、役人替名は各幕ごとに付した。
- 3、各段のセリフごとに行を改め、セリフの頭付け「一」は省略した。
- 4、漢字の字体は現行の新字体を用いたが、正字・異体字などとはなるべく底本の字体の再現につとめた。但し、あまりにも特殊な用字や草書体は次のごとく処理した。

- | | | | | |
|-----------|--------|-------------|-------|-----|
| 遑↓違 | 吳↓異 | 臺↓台 | 寫↓嶋 | 峯↓崎 |
| 套↓松 | 綱↓綱 | 勒↓勤 | 宜↓宜 | 結↓結 |
| 鞆↓鼓 | 扣↓叩 | 釵↓劍 | 寂↓最 | 夙↓尻 |
| 襖↓装 | 勢↓勢 | 奪↓奪 | ホ↓等 | 梗↓抜 |
| 迫↓迄 | 廣↓魔・摩 | 欄↓欄 | 柳↓柳 | |
| ハ・ハ↓候 | 參↓參らせ候 | 入↓也 | ヒ↓被 | |
| ムリ升↓ござります | ぐ↓より | 斗↓ばかり | | |
| ペ↓しめ | ト↓こと | ち↓さま | も↓かしく | |
| 成↓なる | 是↓これ | 被成↓なさる | 此↓この | |
| 其↓その | 爰↓こゝ | 能↓よく | 斯↓かく | |
| 夫↓それ | タア↓タベ | 式ア・服ア↓式部・服部 | | |
- 5、仮名づかいは、すべて底本のままとしたが、平仮名の字体は現行のものに改めた。また、助詞などに用いられた片仮名のハ・ミ・ニなどは、平仮名に改めた。
- 6、本文中のルビについては、底本の性格もあつて統一しがたいので、解説中においておいたそれぞれの凡例を参照されたい。

- 7、句読点ならびに清濁は、校訂者の見解によつてこれを施し、また改め正した。
- 8、思い入れを表わす記号「○」や、反復記号は、底本のままとしたが、「く」は、漢字・平仮名・片仮名の場合に応じ、それぞれ「々」「ゝ」「ゝ」に改めた。
- 9、当字は底本のままとしたが、明らかな誤字は正し、脱字は（ ）を付して補い、衍字は削除した。
- 10、校訂者が意識的に補つた場合、(意味不明・参考補足等)は、それぞれ記号を用いて、その旨明示した。
- 11、原本のままの場合はママと片仮名でルビを付した。
- 12、草双紙は平仮名で表記されたものがほとんどなので、適宜漢字をあてた。
- 13、虫食い・不明は、それぞれ□□とし、ムシ・フメイとした。

鶴屋南北全集 第二卷 目次

靈驗曾我籬	7
貞操花鳥羽恋塚	131
勝相撲浮名花触	241
繪本合法衢	295
阪蓬萊曾我	409
恋女房讐討双六	453
解 說(廣末 保)	485

校訂

靈驗曾我籬……落合清彦

貞操花鳥羽恋塚

第一番目……廣末保

第二番目……菊池明

勝相撲浮名花触……廣末保

繪本合法衢……菊池明

阪蓬萊曾我……渥美本

恋女房讐討双六……落合清彦

錦絵（勝相撲浮名花触）……日比谷図書館蔵

鶴屋南北全集 第二卷

れいげんそがのかみがき
靈驗會我籬

序幕

浜松五社明神の場

役人替名	尾上 松助
本庄助太夫	市川 門三郎
石井右内	沢村 次之助
赤羽根五郎作	坂東 善次
中間鉄平	坂東 大五郎
権八下部細内	市川 万蔵
本庄下部善平	坂東 彦左衛門
社内けいごの者彦助	瀬川 政之助
こし元	中村 春之助
浜名の奥方	中村 里好
右内娘八重梅	沢村 四郎五郎
久下玄蕃	岩井 半四郎
白井権八	松本 幸四郎
藤川水右衛門	若 衆
その他	

本舞台三間の間、向一面のぼたん畑、雨せうじの花だん、桜の立木、葉さくらのつり枝、左右に盛砂、手桶をならべ、幕の内より浜名の奥方、衣装打かけ奥方の形、床几に懸り、八重梅、つめ袖奥女中刀箱をうやく敷持、本庄助太夫、衣装麻上下の形、石井右内、赤羽根五郎作、同衣装麻上下。すべて浜松五社明神社内の懸り、大拍子にてまぐ明。

赤羽 今日奥がた、当所五社明神へ御入りは、氏神へ御参籠といふ、殊には神職の秘蔵ぼたんの花の真盛り。

奥方 当世浜名常陸之介は北条遠江守時政どの、御分地にて、若年ながら神かげの一流達せしと有て、この度頼朝公、富士のみかりのおもよふし、その御ともに召出されしは浜名故家のきぼ。

右内 これによつて鎌倉より、右役目仰付られ、御上使として久下玄蕃さま御入り有て、今日御出立、その見おくりの役目は貴殿の御子息助市殿と、かく申右内なれど、今夕方の御出たつ故、奥がたの御ともにおくれ天龍川まで両人ともまゐるでござろふ。

助太 それまた一しほ御苦労に存る。

右内 殊に奥がたには工藤金石さまの御姉さまにて、諸家方には御重縁。奥方 されば、そのおとゝ工藤金石祐経、病氣によつて御狩の御ともかなふまいかと、嬉しひ中でのまたあんじ。

助太 もつとも頼とも公、富士のみかりにおともは五月下旬とのこと、それまでには祐経さまも御平癒でござらふ。かならずおあんじ遊ばされまするな。

赤羽 それに付、お狩惣奉行の義は、どなたとも相定りませぬかな。

奥方 常陸之介が御狩の御供に、召出さるゝ程の事、その義もやがて相知るで有ふ。先当家のめんぼくに依て。

八重 それゆへ奥さまのことなひおよろこびにて、今日の御参籠も、腰元 ぼたんを御覧ながらのお入り、きゝしに増るこの花盛り。

助太 さるによつて本庄助太夫初々、

右内 石井右内、

赤羽 かく申赤羽根五郎作、

三人 おとも仕つてござりまする。

奥方 家中のものゝ悦びより、自が嬉しさ。若年の常陸之介が御狩のお供も、まづたく神かけ流の上達、指南したる石井右内がたんせひ。

ト助太夫おもひ入有て、

助太 この助太夫とても、浅山一伝流の御師はんの家がらなれども、若とのには幼年より石井どのゝ預りにて、神かけ流の御上達。スリヤ時の廻り合せ、右内どのゝ面目、仕合と申もの、しかし神かけ流も武心のかため、一伝流にはこゝろ元なくござる、ハ、ハ、ハ、ハ。

赤羽 いかさま、武術の流義あまたあれども、身どもなぞが稽古いたす一伝流には何りうも及びますまい。

助太 イヤモウ、他流の太刀筋は一ッ向手れんが見へ申さぬ。とんとたとへにいふはいがとうしんつかふのでござる。ハテ扱、きのどく千萬な。

ト右内むつとして、

右内 これは又御仁躰な。助太夫どのと申、五郎作どののさみなされたるそのおとば、他りうはかくべつ、神影の一流は、諸流へかよふ奥義なれば、ずい分と心付て稽古いたすやうにと、常々門弟どもへ申付てござる。只今のそのおとば、ちと承りにくうござるて。

赤羽 イ、ヤ、ソリヤ手まへ勝手と申もの、神かけ流が諸流へかよへば、この方の一伝流は、一心のもつていたす武術。たわことつくとその舌の根を。

トきつとなる。

奥方 こりや／＼五郎作、ソリヤ何事、しかし当家をおもふ武のはげみ、忠義を大切に神妙にいたしてよかるう。

赤羽 ハ、

トひかへる。

助太 助太夫とても面目次第もござらぬ。

ト八重極こなし有て、

八重 何、助太夫さま、承りませふは、あなたに御出なされます白井権八さまと申、あの御かたは。

助太 権八事は大江因幡守広元、鳥取の家士なれども、父白井兵左衛門は、とのゝ重宝神影流の奥義の秘ぶつ神妙剣の一巻とうぞくにうばはれ、そのあづかりの役目なれば兵左衛門は切ぶく、故有て実子助市を身の養子に貰ひ請たる縁によつて、幼年の権八ゆへ、身がかたへ引取元より神影流なれども当時浅山一伝流の剣術、おり／＼けいこいたして出精仕りまする。

腰元 ま事に白井権八は、よひ殿御ぶり、情らしうて、きつとして。

助太 イヤモウ、近国にまれな美少年と、男女ともこしをぬかしてのひやうばんでござる。

奥方 よりとも公、富士の御狩のきばに付、師はんたる大内へ、常陸之介かたより、遣しくれと有蛙丸のこの一腰、五社明神の神前にて、武運長久を念じ相渡と有。右内、近ふ。

右内 ハア。

ト合かたになり、右内、奥方がそばへゆく。

奥方 腰元ども、そのかたなこれへ。

ト腰元、刀箱を奥方がそばへもつてゆく。奥方、刀を取りだし、

この一こしはかまくらどのまでもきこへある浜名家代々秘蔵のぢうほうかわづ丸、この度常陸之介若年ながらみかりの御とも仰付られし恐れ、当社に於て師はんたるその方へつかわすほどに、ゆへなくうけとり、もつともにおもふわいの。

右内 ハツ／＼、相伝の君恩、武もんのほまれ、かわづまるのひとこし、

奥方 いざ。

トさしいです。右内うけとる。

右内 有がたふぞんじ奉りまする。

トじぎして、

八重 兄源之丞もはや今明日には鎌倉より当着仕るでござりませふ。

ト五郎作、助太夫おもひ入あつて、

赤羽 若とのゝしはんにて、御前のよきまゝ右内どのゝときのめんばく。

(助太) 助太夫なども、うら山しる義でござる。右内どの、ちとあやかりたふござる。

赤羽 イヤハヤ、あだめでたひ義でござる。

右内 もはや神事のこくげんでもござれば、

奥方 このうへみづからは神職かたにて、

助太 さんじ御休息。

八重 おそれながら御前さまには、

皆々 ますおいりあらませふ。

ト唄になり、奥方さきに八重梅、腰元、右内、五郎作、下座へは入。

助太夫残り、思入、

助太 兼而申合せし久下玄蕃さま、弥今夕の御出立、かどでものもふでに当五社明神へ御たちより、そのせつ何かの義を申あげんとやく致(せ)しが、もはやおいりでありそふなもの。

ト大拍子になり、向ふより久下玄蕃、野ばかま、ぶつさき羽織大小、あとより中間付そひ、藤川水右衛門、着ながし、深あみがさ、大小にて、風呂敷づゝみを背おひ、筆を大ぶんもち、足がる彦助、棒をつき出て来て、

足輕 さがらぬか。

ト花道にて、

ヤイ、状書手習筆、うぬ、むさひなりをして社内へ叶はぬ。ことにこんにちは御領主のおくがたのお入り、またはそれにおいであそばさるゝかまくら家の御直臣、殊に御上使。その御前ともはぐからず慮

外なやつ。

水右 慮外も緩急もいるものか、筆をあきなひにするおさむれいだは。

足輕 こいつ、ふとどきな。さがれ。

ト云く三人とも本ふたひへくる。助太夫、玄蕃をみて、

助太 これは久下玄蕃さま。

玄蕃 介太夫どの、参詣でござるか。

助太 奥がたのおともでござりまするが、かねておたちよりを相待ちおります。

玄蕃 身もいでたちの祝義に五社明神へ参詣いたした。

助太 見れば当社けひこの下部、なにをかしましうもうすのじや。

足輕 申上ます。このあみがさをかぶりましたるこじき同前のなまり

ぶしが慮外を仕りまするゆへのことでござりまする。

水右 うぬ、神職のけいごのくせに、さつきから身どもをこじきと。何がこじきだ。

何がこじきだ。

足輕 うぬがさまがこじきだから。慮外のやつめ。

ト六尺棒で水右衛門へうつて懸る。水右衛門、棒を引たり、

水右 われこそ慮外ひろぐ。

ト足輕をばうにてたゝく。

足輕 ヘイ、御免なされませ、おこじきさまは慮外をなされても

よろしうござりまするから、おたゝきなされずと、御免なされませ。

玄蕃 社内けいごのものは格別、久下玄蕃がまへにて慮外なあみがさ。

水右 そんならあなたが久下玄蕃さ。

ト恠りしてかさを取。

助太 そちや藤川水右衛門。

水右 介太夫どの、奥がたのおともでござるか。

ト玄蕃思ひ入有て、

玄蕃 藤川水右衛門とあるからは、もしや藤川ト庵の、水右 忤の水右衛門でござりまするは、これははじめておめに懸ります

る。

玄蕃 兼而鞠谷流^{キョクコ}の達人とうけたまはれば、すへ頼も数存る。このうへとも身がたへたよられたがよひ。

助太 水右衛門の義に付、この介太夫もしかと申入て、カノ神妙けんを。

ト水右衛門おもひ入有て、

水右 おかつしやい、又してもくその事を。いけばかくしひ。

トきつといつて、

玄蕃 さま、また御意得ましよう。

ト大拍子になり、水右衛門つひと下座へは入。玄蕃跡見送り、

玄蕃 何やら介太夫どの、申すことを承り、むぎどふなるいまの様子。

ハテナア。

ト思入。

助太 イヤ、けいごのものはやこれに用はなひ、次へく。

足輕 ヘイく、私は棒にてせいしまして人をぶつが役目でござりまするが、いまのさむらゐに棒をしようはされ、まことにこれが棒しよひの入道前の関白太政大臣、ハテ長ひ名も有な、おれはつきぢ、そこで役目は六尺棒をつきぢい。○

トほめる。神樂になり、足輕、棒を突、下座へは入。跡合かた。玄蕃、

助太夫おも入有て、

玄蕃 今たほつそくにて当社へ参詣は、かねてだんじられたるかのどくやく。

助太 ア、モシ ○ つてをもとめてもふし遣しましたれど、いまだその一ちやく相とゝのひませぬが、もはや家来は帰るでござろふ。

玄蕃 その一ちやくみつじゆへ、身どもが受取、かまくらに罷在常陸之助が近じゆのもの、かねてこなたへ荷だんの仁へ。

助太 ひそかにあなたのおはからひ、さきの名も相しれ、書状もしたゝめ、則こゝに。

トくわい中より書状をいだし、

これをさしあげますからは、一葉参り次第、はゞかりながら一所にとゞけ下さりませふ。

ト玄蕃、書状をとつて、

玄蕃 しからば、しばらく当社にて相またん。

ト向ふにて、

鉄平 イ、ヤ了簡しなひぞく。

細内 了簡しなひといつて、どふするく。

ト大拍子になり、むかふより細内、中間にて、たんぼつきけいこやりをつき、鉄平、中間にて、なまゑひのこなし、われたる目録ばこをもち、取合ながら出て来て、

これどふするく。

鉄平 どふするといつて、かまくらのおきやくじんさまのところへ引ずつて行くのだ。

ト本ぶたいへくる。

玄蕃 浜名(家)より身どもへ見送りの中間鉄平、

鉄平 この折介めがくらひよつて、お客人玄蕃さまのお見送りのおともを仕りまする私、もつてまいつたおはつをのめくろく代を、けいこやりにて突わり、こわしましてござります、エイ。

トなまゑひのこなし。助太夫見て、

助太 その下部はみどもが方における権八がめしつかひ。

細内 なるほど細内でござりまするが、私が旦那権八さまのお迎ひ、毎日五社明神へ日参ゆへ、これへ参る道にて、大部やの中間衆のむたひのいたしかた。

鉄平 どこにむたいだ、うぬ、くらひよつてもくろくだひをだみなしに。細内 イ、ヤ、酒はいつかふたばませぬ。

助太 だまらふ下郎め、大切なるお客人玄蕃さまをお見送り、おともの衆は、お上^{お上}の中間、それへ慮外いたすふとゞきもの。

玄蕃 ことに当社へ参詣はつをのめくろくだいをこはせしは第一不吉、身がこゝろ懸り。

細内 イ、ヤ、大旦那介太夫さま、何も私がつきあたつたのではござりませぬ、あつちからこつちへ。

鉄平 何をたわことを。慮外をしたうへ、うぬが勝手を。

助太 コリヤヤ細内、扣へぬか。

細内 テモ、わしは酒にもよわず、突かゝりはいたしませぬ。

助太 ハテサテ、コイツガ。

細内 イヤ、中間奉公こそいたせ、武家のふちをいたゞきまする細内、まがつたことは申ませぬ。

助太 イヤ、おのれ、つね、からもたとへ無理非道でも権八が申事は一言でも扣へるが、身が云事は常からきゝいれぬやつ。

鉄平 こんなやつは以後のみせしめ。

玄蕃 よふござる、助太夫どの、かまわつしやるな。身がほつそくのさひさき、神もうでのめくろくだひをこわされしは心懸り、身ども同道にて浜名どの、屋敷へかへり、急度曲事に申付てみせふ。

細内 エ。

トびつくりする。

助太 まことに蛙は口ゆへと、片いき地ものゝ日ごろの不届、身が家来ながら権八が国もとよりつきまいつたその方ゆへ、ふびんをくわへおけばつけ上り、いまさ身どもが相済ぬぞヤイ。

玄蕃 イヤ下郎め、玄蕃が手をおろし、浜名家へ召つれ、急度せいばい、サアうしやアがれ。

ト三味線入りの大拍子になり、玄蕃、鉄平に細内を引立てさせ、花道へかゝると、むかふより白井権八、若衆方、着つけ羽織馬乗袴、大小の拵へにて、面ばうに竹具足、かわつばの木刀をもつて、稽古がへりのみへにて出て来て、花道の中ほどにて行合、これを見返つておどろく。

玄蕃 わうくわんのじやまだ。わつばめ、そのけ。

〔※トゆかふとする。〕

権八 そちや家来のほそ内。

玄蕃 何、わが下部か。

権八 何ゆへにおさむらひにはこのろうせき。

玄蕃 こいつが慮外。

権八 何かよふすは存じませぬが、下部はこれへ。

ト細内を引のける。玄蕃きつとなり、権八、細内をうしろへかこふて、本ふたいへ来る。助太夫みて、

助太 コリヤ、白井権八ではないか。

権八 あなたは助太夫どの、今日は奥がたの御とも、御苦勞に存じまする。

助太 それなるは今度かまくらより、御上へ御上使の御客人、今日御発足にて当社へ御参詣、そのおはつをのめくろくだひをこわせしぶてうほう、それゆへ身がさまゝに申きかせしが、きゝいれなき常からのかたいき地。

ト権八これをきひておどろき、平伏して、

権八 ハ、大切な御客人とあれば、家来が不調法は、権八がひたすらおわび申します。

玄蕃 すりや下郎がはびことを。

権八 ハッ。

助太 なりにくひ下郎めがおはびなれど、権八、先その身のおはびをいしたがつい。

権八 あの、わたくしが身のおはびを。

助太 玄蕃さまはおやくがらにて、かまくららの御上使、おわびをいたそふと思はゞ、その大小をおめて、犬つくばいにつくばつて、御わびいたせ。

ト権八、思入。

鉄平 それ／＼、その上にて、この中間の鉄平にも、あたまをさけて、丸はだかになつて、おどりをおどつて平伏しろ。

権八 ヤ。

トむつとすることなし。

玄蕃 こりや、それがわび事のたねで有ふ。さすが助太夫どのは老功の了簡、できた／＼。

細内 そりやまたあんまりなおはびのしやう。

トきつとなる。

権八 こりや。

細内 いやと申して。

権八 ハテ扱、きゝわけのなひ。大切なるお客人と有ゆへ、たとへ七重のひさを八重におつても、御わびを申が貴賤の礼義、それにこゝろのつかぬ無礼ものめが○ 何とぞおはびのほど、ひとへに願ひ率ります。

助太 さやうにおもはゞ御客人のおそばへまいり、おみあしにてふみにじられて、おわびを申せ。

権八 サア、〔※それは。

助太 たゞし犬つくばいか、

権八 サア、

兩人 サア／＼、

助太 権八、おはびいたさねば、同居いたす助太夫が相済ぬ。

権八 その義ばかりは。

ト思入。

私とても兵衛の家に生れし白井権八。

助太 すりや剣術達れんゆへ、ならぬといふその身のこうまんか。

権八 イヤ、まつたくもつて。

玄蕃 さほどぶじゆつを申たてゝあやまりをかへりみぬものならば、いっそこゝろみに身どもが相手になつてくれふ。

権八 エ、。

トびつくりする。

玄蕃 剣術の相手に。

権八 アノわたくしを。

助太 イヤ／＼そりやいらぬもの、申さずともしれた事、かまくら家の御家臣、武術たんれんの玄蕃さま。

権八 どふいたしましてわたくしが。

ト思入。玄蕃こなし有て、

玄蕃 そりアはや、どふでこの玄蕃は、ぎやつといふと武芸の中、弓矢鉄炮、やり、なぎなた、刃がねの中でそだつた身どもだ。権八どの、仕合は誠に鬼にがきのじやれ。しかし、こゝろざしがふびんだ、まつ玄蕃が武じゆつたんれんは、剣術が関口流で鎗術が宝蔵院、馬が大坪、弓が日置流、たましいが大将で守護神が摩利支天、まことに鬼に鉄棒だ。あまり剣術／＼と申ゆへ、一トしあいいたしたうへ、その方がまけとならば、真剣をもつてたつたひとうち。

細内 エ。

トおどろく。

玄蕃 おどろく事はない、一刀の下にいのちおはるはした事、もしまた千に一万に一ツ、その方がけがのひやうしにかつたらば、それを功に、とがをゆるしてくれふわへ。

ト権八思入、

権八 スリヤ何と仰られます、そのしあいにわたくしが勝ちましたらば、

玄蕃 まぐれあたりに勝たらば、わびのいらつ、ゆるしれくれるは。

権八 そりや有がたふござりまする。

玄蕃 幸ひその方が持ちまいつたその木刀、これへ。

ト鉄平、竹刀二本まんなかへなす。

権八 しからばしあいの、

玄蕃 一手に百術、

権八 御ふそくながら、

玄蕃 しなへのあしらい、

権八 めうがにかないし、

玄蕃 仕合ものめ。

トだましうちに打てかゝる。立廻り、白ばやしになり、宜敷ありて、
しやんととり、

こりやでつちめ、中／＼やりおつたわへ。

権八 イヤ、まことにみじゆくでござりまする。

玄蕃 ところを。

トまたはらつて打て行。たち廻り、色／＼あつて、玄蕃あやうくとま
り、

はて、みが有ておもしろいわひ。

権八 イヤ、さのみでもござりませぬ。

玄蕃 ゆだんをうかどひ、

ト立廻り色々おもしろき有て、玄蕃しなへを打おとされ、たゞかれる。
助太夫おもいれ有て、つか／＼来て権八を扇にて打すへる。細内きつ
となる。

細内 コリヤ権八さまを、

権八 何でうちやくめさるゝな。

助太 何でとは不調法ものめが。お上のお客人へたいして、このそこつ

権八 でもおきゝの通り、しあひの相手に勝ならば慮外の科をゆるして

やらふと有るお客人のお約束ゆへ、立合ましたは科をおはびのため。

それにこなたのこのせつかん。

助太 いかにじやくはいないればとて、そのしあひをかちとおもふは、慮

外をかさめるうつけもの、だまりおらふ。

玄蕃 介太夫どの、くるしうなひ、でつちめが勝はほんのまぐれあたり
この玄蕃が負けと○ サア、いへばいふもの、コリヤ上手の手から水

だ。まことに神職の庭先、こゝのとびいし、あそこの木の根、つまづ

ひたのだ。大功は細璣をかへりみず。これしきのこと、大事なひ／＼。

ヤイ権八。

権八 ハツ。

ト平伏する。

玄蕃 その身の武術にめんじ、ゆるしがたき科なれど、ゆるしてくれる
ぞ。

権八 有がたふぞんじまする。

助太 ハテ、仕合ものめ。

鉄平 おらアどふやらよひがさめたよふだ。

助太 この場はあなたが御仁心にて、そのまゝに御用捨下さるのじや、
下郎めも有がたひとおもひおろふ。

ト細内、前へ出て、ふせう／＼に、

細内 有がたふぞんじまする。

玄蕃 下郎め、うぬ。

ト玄蕃、扇にて細内がみけんへきずを付る。細内これをみてきつとな
り、ムウトゆかふとするを権八引廻す。玄蕃と顔見合、権八じぎする。
これをきつかけ、チャンと哥になる。権八さきに細内つきそひ、下座
へは入。

介太夫どの。

助太 玄蕃さま。

玄蕃 がきとあなどり○ ほんのこれが弘法も筆のあやまり。

助太 御もつとも。

玄蕃 イザ押しよくへ、

助太 マア、ござりませ。

ト大拍子になり、玄蕃さきに助太夫、鉄平、下座へは入。直に合方に
なり、引きちがへて八重梅出て来て、

八重 たしかに今見かけ申たが権八さま、日頃から思ひ思ふていろ／＼

と、いゝよるつてをたよりても、つれない返事。わたしやこのよふに、思ふておりますに、嬉しい返事のないと〔※いふ〕は、ほんにマアどふよくな。人にばつかりもののおもわせて、しんきな事ではあるぞ。

トこの内、うしろへ水右衛門出かゝり、八重梅にだき付。びつくりして、

エ、おまへは水右衛門さま、こゝはなして下さりませ。

水右 イ、ヤ、はなされない。アノものがたひ右内どのゝめかほをしのび、御てんからくるたびくどきかけても返事がないが、身どもはこなたに首つたけ、ほれてくほれぬき井戸の水右衛門だ、サア、ひいやりと返事が聞たい、どふだく。

八重 返事とは何の事じやへ。

水右 何の事とはしらぬしい、色よひ返事を。

八重 エ。

水右 こゝで逢たは五社明神のおかげ、まことにむすぶの神、それだにやつて。

トだきしめるをふり切て、

八重 ア、申、わたしやそのよふな事はしりませぬ。

水右 しらないものが、ナゼ権八をしんきだといつて尋た。

八重 サア、それは。

トつかへる。

そのおまへのおこゝろさしはうれしいけれど、とゝさまの手まへを思ふて。

水右 それで返事をしなひのか、そんならマア相談は出来たといふもの、こいつはどふもこたへられぬわい。

トまただきつく。

八重 あれイナア、はなさんせ。

トふりきり、にげる。神樂になり、水右衛門、八重梅をおひまはす。このうち下座より右内出て来る。八重梅は下座へにげては入。水右衛

門、八重梅とおもひ、右内にだきつく。〔※顔をみて〕悔りして、

水右 ヤア、これは先生。

右内 藤川水右衛門。

ト水右衛門ぎつくり思入。

りふじんにむすめをとらへ、途中におひてびろうのふるまい。いかに若いとて座^ざもことによる。嗜^しめされ。

水右 イ、ヤ座奥でない。

右内 なんと。

水右 みつけらるゝ上からは、かくそふよふはない、御息女八重梅どのを水右衛門が婦妻に申請たひ。

右内 ヤ、

ト思入有て、

そりやはや、どふで一度は片付ねばならぬ娘、ヲ、といつてその方へくれたいものなれど、

水右 氣にいらぬか。

右内 いかにも、右内がこゝろにそまぬ。

水右 なんと。

右内 水右衛門、よふきけよ。

ト水右衛門をひきすへる。〔※相方〕

そのほふ諸国を浪々致し、本庄助太夫へたよつて立身の願なれど、助太夫ともあいそづかし、身ども、親^{おや}ト庵へは、いにしへの少々のゑんあれば、きのどくにぞんじ、せはいたしおるを、おのれがこうまん、鞠谷流の指南などゝ、ぶし付をしらぬその方、それもならずして、このほどは身が手まへを病氣といつわり、筆うり渡世とは、武士の身の有まじき致方、見さげはてたる人非人、まだその上に身が娘にれんばをとほ、よくも左ようなことがいはるゝ。ちく生でも三日かへばそのおんをしるに、おんしらずの水右衛門め。

〔※トいろ／＼悪口して、はぢしめる。水右衛門もじく／＼と思入あつ